手と手と手

岡山発 国際貢献

スマトラ沖地震被災地インドネシア・バンダアチェを訪ねて

残る傷…たくましく生きる人々

連載企画「手と手と手―岡山発 国際貢献」の取材のため、昨年十一月、スマトラ沖地震最大の被災地インドネシア・アチェ州の州都バンダアチェに入った。

現地で復興支援プロジェクトを展開する国際医療ボランティアAMDA（本部・岡山市楢津）の活動現場を巡った。

飛び込んでくる惨状に目を奪われる。野原か湿地に見える土地は、津波前には家が建ち並んでいたという。ここも、あそこも。海辺の町に、津波は、いまだに深い傷を残していた。

一方で、人々は笑顔を忘れず、懸命に生きている。家族を、職を、家を。すべてを失いながらもなお、たくましく生きる姿に勇気づけられた。

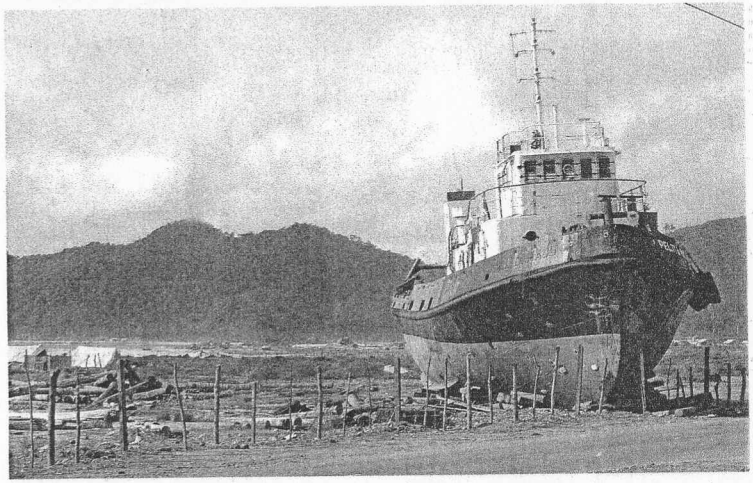
米南部を襲ったハリケーン、パキスタン地震と、大規模災害が続いた昨年。次々と災害、紛争が起こる度に、それ以前の記憶が薄れていく。「国際貢献は、まず被災者に思いを寄せることから」。NGO（非政府組織）関係者は語った。「アチェのことを忘れないで」。被災者は訴えた。

アチェ州の現状を写真で紹介する。

（国際貢献取材班・斎藤章一朗）

消えた村

立派な家が１軒だけ残る海辺。進入路の跡が、住宅街だったことを物語る



強大な力

津波で陸に運ばれたままの船。想像を絶する津波の力を見せつける

祈り

アチェ人のほとんどがイスラム教徒。一日5回のお祈りは子どもでも欠かさない

貴重な時間

移動図書館でAMDAから避難所に届けられた本を読む母娘。娯楽の少ない生活の中で、貴重な時間だ

質素な暮らし

テントで生活する避難民。床板は津波で流されてきたゴミから拾ったという

笑顔

避難所で暮らす子ども。つらい境遇にも負けない笑顔がまぶしい

教育支援

AMDAの教育支援プロジェクトでメッセージボードづくりに励む避難所の子どもたち